ねずなきをしいでたりける、さきなる女房ものおそろしや、螢にも聲のありけるよとて、つやつやさわぎたるけしきなく、うちしづまりたりける、あまりに色ふかくかなしくおぼえけるに、今ひとり、なく虫よりも、とこそとりなしたりけり、是もおもひ入たるほどおくゆかしくて、すべてとり〳〵にやさしかりける、

音もせでみさほ（○みさほ、後拾遺和歌集三作おもひ、）にもゆる螢こそ鳴虫よりも哀成けれ

螢火亂飛秋已近、辰星早沒夜初長、

夕殿螢飛思悄然

つゝめどもかくれぬ物は夏むしの身よりあまれる思ひ成けり

〔四季物語五〕石山に詣でぬ、かへさには、螢いくそばく、薄衣の器に包み入れて、宮の内に奉れば、こちらの御簾、或は御局のそこらに、數多放されて、晴るゝ夜の星とものせしも、いひ云らず思ひたどりぬ、されどこの蟲も夜こそあれ、晝は色異樣に夜の光にはけおされて、劣れる蟲也、まいて手に觸れ身に添へては、惡しき香うつり來ぬ、手には蘭を握り、身には百壽の香を塗る、若人君の前にては、心あるべき蟲の香ならし、

〔伊勢物語下〕はるゝ夜の星かかはべのほたるかもわがすむ方のあまのたく火か

〔明月記〕嘉祿二年四月七日辛卯、招請承明門黃門令衆灌佛、布施三ヱタスキ薄物小單文裏白張薄物、以胡紛キコエヌ虫ノ思ダニト令書、以几張手竿横以黑紐結付之、其中入螢也、

〔つれ〳〵草拾遺〕ほたるこそ、猶なまめかしくをかしけれ、あこがれいでしたまなど聞えしは、わびしけれど、風にさそはれて、そこはかとなく、とびちりたるもをかし、夜ふけて、軒ちかくきらめくが、まどしとみなどのうちについ入て、とびまどひたる、ことにをかし、

〔牛馬問四〕宗祇石山にもふで螢を見て、